

地図資料「寺社仏閣にまつわる主な伝説」と併せて御覧下さい。  
(禁帯出)

令和7年度 三春町歴史民俗資料館春の企画展

「身近な神さま仏さま」  
～絵解き・伝説から見る祈りの世界～

＜参考資料＞

三春地方の寺社仏閣にまつわる  
主な伝説・伝承



＜疱瘡観音／宝伝寺観音堂＞



＜絵解き／七草木阿弥陀院尊陽寺＞



＜蛇石巖島神社／蛇頭石＞



＜斎藤・安養寺／如意輪観音石像＞



＜熊耳／古殿観音堂下の大井戸＞



＜荒町華正院馬頭観音堂本尊馬頭観音像＞

# 目 次

地区	NO	寺社仏閣	伝説	頁	地区	NO	寺社仏閣	伝説	頁	
沢石	1	天日鷲神社 1	坂上田村麻呂伝説	1	中妻	23	塩釜神社	水かけ祭りの始まり	10	
	1	天日鷲神社 2	霊石・子育て水晶伝説	1		24	乳付け観音	坂上田村麻呂伝説	10	
	2	宝伝寺観音堂	疱瘡観音伝説	1		25	斎藤 愛宕神社	子どもと遊ぶ愛宕さま	11	
	2	宝伝寺	富沢八士伝説	2		26	見渡神社	盗人の改心	11	
	3	富沢稲荷神社	お稲荷さまの霊験	2		27	安養寺	良笈上人とねじれ観音	12	
	4	富沢愛宕神社	飛んできたご神体	2		28	子安薬師堂	坂上田村麻呂・徳一大師伝説	12	
	5	宮代神社	南朝と富沢氏	3		29	薬師寺	いたずら好きのじいさま	12	
	6	古館神社の由緒	勧請の由来	3		岩江	30	直毘神社	武渟川別命の東征	13
	7	現人神社の由緒	南朝の皇子義良親王伝説	3			30	直毘神社	舞木の名の由来	13
	8	大日堂	ご来光奇譚	4			31	北山地蔵堂	子どもと遊ぶ地蔵さま	13
9	高木神社 1	坂上田村麻呂・徳一大師伝説	4	32	寺山観音堂		観音堂を守ったツブ	14		
9	高木神社 2	南朝の皇子義良親王伝説	4	33	薬師堂の由来		萱ノ木薬師伝説	14		
9	高木神社 3	戦国大名田村氏の戦勝祈願	5	三春城下	34		華正院 馬頭観音堂	坂上田村麻呂・三春駒伝説	15	
要田	10	古殿観音堂	大井戸と十一面観音さま		5		35	八雲神社	疫病封じの胡瓜天王	15
	11	春日神社	学僧屋敷の話		5		36	守城稲荷神社	藩侯の命名	15
御木沢	12	鹿島神社	鹿島さまの霊験と宮信田の由来		6		37	州伝寺	本尊丈六仏の由来	15
	13	篠ノ内地蔵	義民（善吏菩薩）伝説		6		38	天沢寺地蔵堂	身代わり地蔵尊 （「安寿と厨子王」伝説のもと となった話）	16
	14	阿弥陀院尊陽寺	絵解きに人々が集ったお寺		6	38		天沢寺	和尚が侍をかくまった話	16
	15	若草木神社	殿様の参拝		7	39	八幡神社	八幡さまの霊験と石灯笼	17	
	16	満願虚空蔵堂	新羅三郎義光伝説		7	40	旧明王院薬師堂	弘法大師伝説	17	
	17	物外地蔵堂	高僧誕生伝説		7	41	法蔵寺	甘酒地蔵尊のいわれ	17	
中郷	18	大石稲荷神社	弘法大師伝説		8	42	紫雲寺 高乾院 真照寺	はら切り梅・猫石 大乘妙経供養塔 和尚の袈裟 以上 三春化け猫伝説	17	
	19	甚十郎紋十郎地蔵	義民伝説	8						
	20	巖島神社の蛇頭石	松井民次郎の大蛇退治伝説	8						
	20	巖島神社の蛇頭石	松井民次郎大蛇退治別伝	9						
	21	根本笠石八幡神社	八幡太郎義家伝説	9						
	22	狐田稲荷神社	狐が田植えをした話	9						
	22	狐田稲荷神社	狐田のお稲荷さまと守城稲荷さま	10						

# 三春地方の寺社仏閣にまつわる主な伝説・伝承

2025年3月

三春町歴史民俗資料館 令和7年度春季企画展資料

## ＜沢石地区＞

### 1 天日鷲神社－1 ～坂上田村麻呂伝説～

延暦年中、坂上田村麻呂が東征のおりに、この地で苦戦を強いられました。戦いに疲れ、巨石のそびえるこの地で一休みしていたときに、一匹の鷲が飛来して、ひときわ高い杉の木に止まりました。これを見て、吉兆が訪れたことを知り、ここに天日鷲神を祀る社を建て、祈願してから戦いに挑み、ついには蝦夷を倒しました。これが、天日鷲神社（旧鷲妙見大菩薩または鷲大明神）の始まりであるといえます。

（「各神社御由緒調査」）

### 1 天日鷲神社－2 ～霊石・子育て水晶伝説～

南北朝時代の延元3年（1338）、この地を領し、鷲大明神（天日鷲神社）の神官を兼ねていた富沢伊賀守は、南朝方の北畠顕家に従って、上洛して転戦し、顕家戦死後、淡路島に渡り、さらに阿波国に渡って阿波国忌神社神官方に身を寄せ、神事に努めたところ、帰国の際に神官よりその敬神篤志を賞されて水晶石を賜り、これを家宝としました。（戦国時代の領主として記録に残る富沢式部はその子孫である。）

降って天保年間、三春藩主がこの水晶石の来歴を聞きその秀麗さを賞し、召しあげて座右に置いたところ、藩主の世子が次々と夭逝しました。もしや水晶石のせいかとこれを神として祀ったところ、その後は世子が健やかに成長したといえます。以後、水晶石は子育て大神として人々の信仰を集めました。

（「各神社御由緒調査」／富田耕一氏談）

### 2 宝伝寺観音堂 ～疱瘡観音（十一面観音）伝説・長寿と宝伝の話～

むかし、平安時代の延喜年間の初めのころ、長寿と宝伝という二人の法師がいました。諸国を遍歴して、ついにこの地にたどり着き、仮の住まいを始めました。日夜を問わず仏道に勤め励み、外では、人々を教え導き迷いから救い、内では読経に勉め、香花や洒水を欠かさず、仏祖の供養を行っていました。

ある時、たまたま宝伝が疱瘡にかかり、燃えるような熱が出て、やがて精神も錯乱、まさに死が目前に迫る有様となりました。友を思う長寿は、昼夜を問わず宝伝の看病に努めましたが、もとより財産はなく、生活は貧しかったため、医者にかけることもかきません。天に誓い、地に祈りながらも、徒に嘆き悲しむことしかできず、長寿の心は沈むばかりでした。

そのようなある晩、長寿の夢に神が現れ、「われは、むかしより迦葉仏の縁によりこの山に住む十一面観音である。おまえは、宝伝への友愛を尽くしてきたが、その真心にわたしは大いに感じ入った。おまえがわたしのために御堂をつくり祀ってくれるならば、宝伝の病は霜の日より早く、速やかに治るであろう。そして、広く信者を救おうとする思いを忘れることなく、人々を教え導きなさい。」というお告げがありました。夢から覚めたのは、延喜辛酉の年、七月九日の夜のことで、長寿はすぐに周りの人々にお告げの内容を話し、浄財を募りました。すると、たちまち浄財は集まり、御堂が建てられて、宝伝の病も夢の如くたちまち回復したのでした。

この奇譚が伝わると、周りの村々でも疱瘡に罹り苦しむ人がすくぶる多かったので、続々と詣でる人、治癒する人が増え、その霊験は日に日にあらたかになっていきました。これが広く人の知るところとなり、やがて「疱瘡観音」と呼ばれるようになりました。

「この奇譚こそは、観音の妙智力が世の中の苦を救うということが嘘ではないことの証であり、「疱瘡観音」に信者が一たび拝礼すれば、幸せをもたらす功德は計り知れないほど大きい」と伝えられています。

（「社寺明細書並縮図」）

## 2 宝伝寺 ～富沢八士伝説～

頃は、後奈良天皇の御代、享禄2年(1529)9月24日、この地(富沢)の獵師の佐久間豊後、中山孫治右衛門、武田阜衛、渡辺伊賀、飛田縫殿、遠藤若狭、本田半左衛門、面川忠治の八人の男たち(八士)が猪を片曾根山まで追っていきました。山道がはなはだ急峻で険しくなったところで、ふと見ると大岩の下に一人の異形の僧が座っています。不思議に思って、わけを聞いてみると異形の僧はこう語りました。

「われは、大明(中国)より来たものである。ここに来て十余年、お前たちに過去の因縁を聞かせるために待っていた。お前たちの前世は、中国の育王山の鵲(かささぎ)であった。いつも御堂の傍の大木に棲んでいたのだが、いつのまにか御堂から聞こえる読経の妙音に感じ、ついになかなか生まれ変わることができない人の身に生まれ変わり、悟ることのむずかしい仏法の真理を聞いたのである。しかし、お前たちは、今、殺生を生業としている。これは、菩薩の戒律で最も重い罪にあたることをしているのである。だから来世は、再び畜生道に生まれ変わる因果をまぬがれることはできないだろう。これは、われにとってとても悲しむべきことである。今、因果応報の道理をおそれて、すみやかにその生業を改め、懺悔して三宝(仏・法・僧)に帰依するのであれば、現世では永く子孫が栄え、後生は必ず天上に生まれ変わることができるであろう。」と。

八士は、これを聞いて、大いにその所業を悔悟して、異形の僧に「是非あなたをお招きして、寺院を建立したい」と申し出ましたが、僧は、「片曾根山の山麓に存宅という和尚がいる。これに頼んで開山とせよ。」と言い残し、たちまちのうちに深山の内に消えてしまいました。

そこで、八士は、存宅を招き開山として一寺を建立しました。これが、長寿山宝伝寺です。

八士は、血(法)脈を受け、その法名を「伝山元宝」「常山政廣」「徳山道春」「超山雲龍」「勇山元房」「道山景正」「賢山季高」「機山道成」と号し、その後はみな、異形の僧を偲び、仏戒を持ち、称名念仏を唱えて一生を送ったといいます。

(「社寺明細書並縮図」)

## 3 富沢 稲荷神社 ～お稲荷さまの靈験・すそなが文蔵と喜作の話～

時は、将軍藤原頼経、執権北条泰時の頃、文暦元年(1234)三春城主田村利顕の次男刑部少輔則顕が橋本本館に住んだときに、その宅地内にその氏神として建てられたのが稲荷神社です。その孫顕道は、北畠顕家に従って上洛し、合戦にて討ち死にしましたが、その子顕盛の代に及んで北ノ内にこの社を遷座しました。大変靈験あらたかな稲荷さまで、氏子の家に何か変事があると知らせてくれ、よいことがあるとお稲荷さまは「コン」と鳴き、悪い時があると「ガイガイ」というそうです。

富沢の山の中に文蔵という大工がいました。仕事にかけては上手な大工なのですが、どんな時でも裾を端折ったことがなく、長裾のまま仕事をしているので、「すそなが文蔵」と呼ばれていました。ある日、文蔵は稲荷さまに御幣束を上げて「もし、稲荷さまのご利益があるならば、おれの家に来て鳴いてみせろ」といって帰ってきました。門の口を入ろうとしたところ、確かに稲荷さまの「コン」という鳴き声があったので、文蔵は、自分で鳥居を新しく作って奉納したそうです。

また、喜作という大工がいました。祝い事があってほろ酔い加減で帰ってくる途中、稲荷さまの前で休んで一服付け、家に帰ってきて寝る前にまた一服付けようと思いましたが煙草入れがありません。「さては途中で一服した時に忘れたんだな。」と思いましたが、「こんな夜に又あそこまで行って探してくるのも大変なことだ、明日行って探すべ。」とその夜は寝てしまいました。次の朝、縁側を見ると、夕べ忘れた煙草入れがちゃんとおいてあったので、「これは日ごろから厚く信心している稲荷さまの使いが持ってきてくれて、縁側さ置いて行ってくれたんだべ。」という話になったということです。

このような話が伝わって、地元の人だけではなく近隣の村からの参拝客が訪れるようになったそうです。

(「各社御由緒調査」／三春町史／富田耕一氏談)

## 4 富沢 愛宕神社 ～飛んできたご神体と御利益の話～

火伏せの神を祀っています。由緒ははっきりわかりませんが、戦国時代より以前からのお宮さまであるといい、火廻用慎の札を配りました。元々は松沢との境にあって、松沢の人たちと共同で祭祀を行っていました。あると

き(かなり昔)に、ある暴風が吹いたときに神さまが飛んできて松の木の枝に引っかかったそうです。その後で、松沢の人が来て神様を運ぼうとしましたが、腰が立たなくなったりして持っていきませんでした。結局、神様はこの場所に行きたかったのだらうということで、新たにここに社を築いたといえます。

昔、親の反対にあった男女の男の方が病にかかったときに、女の方が愛宕様に日参してその御利益で病気を治し、結ばれたということがあり、それから、縁結びの神だともいわれたそうです。祭礼には獅子舞と太々神楽が奉納され、諸願の参拝者で賑わったといえます。

(富田耕一氏・渡辺仁氏談)

## 5 宮代神社 ～南朝と富沢氏～

旧三渡大明神、後醍醐天皇・後村上天皇・陸奥宮を祭神としています。南北朝時代、富沢の領主富沢伊賀守は北畠顕家に従い、転戦を続けた武将であり、ほかの武将達が北朝方になっても、南朝方を最後まで貫いたとされています。その子孫も南朝に味方して、後醍醐天皇・後村上天皇・陸奥宮を祀ったといわれています。陸奥宮は、後醍醐天皇の長子の尊良親王の皇子であり、守永親王(守永王)あるいは宇津峰宮と呼ばれ、南朝の劣勢の中、北畠顕信に奉じられて二度にわたり宇津峰に籠り、田村荘司家や伊達氏等に支えられ北朝側と対峙し、宇津峰陥落後も顕信と共に南朝方の支柱として奥州で戦い続けた皇子であります。守永親王は、宇津峰城の落城後に富沢氏一族に守られここに落ち延びたとされています。富沢氏は後村上天皇(義良親王)とその甥の守永親王の旗下でずっと戦ってきたので、皇子たちは主筋にあたります。ですから、富沢一族にとっての戦績の名残りと誇りが宮代神社なのだといわれています。宮ノ下という地名も残っています。

(「社寺明細書並縮図」／富田耕一氏談)

## 6 古館神社の由緒 ～勸請の由来～

一条天皇の御代、延元年中に村内に宥榮という学術修行を厚く志す学僧がおりました。都に出て安倍晴明のもとで学んでいましたが、晴明に故郷の村の苦難を話すと、蒼稻魂神を守護神として祀れば、金銀米穀に不自由をさせないであろうとの教えを受けました。晴明を敬いその奇譚を間近に見ていた宥榮は蒼稻魂神(白狐稻荷明神)を厚く信仰して、故郷に帰るとこの古館山に勸請して創建しました。靈験あらたかなこの神さまを、享徳年中、実沢館主の岩崎山城一族が深く崇敬し、拜殿を建て、その後武運長久、五穀豊穰、学問成就の祈願所としました。おかげで、岩崎家は子孫が続き、長く本山修験の職を務めました。また、一村落の氏神として厚く信仰されるようになりました。

(「おらが里のざっと昔」／富田耕一氏談)

## 7 現人神社の由緒 ～南朝の皇子義良親王伝説～

後醍醐天皇・後村上天皇・陸奥宮(守永王)を祭神としています。

後醍醐天皇の建武の新政が始まると北畠顕家が皇子である義良親王(後の村上天皇)を奉じ、奥州鎮守府下向してきましたので、実沢上館の館主佐久間右京大夫は、これに従いました。

しかし、足利尊氏が、後醍醐天皇に反旗を翻し、南北朝時代になると、南朝方は次第に押され、義良親王らは奥州鎮守府を捨てて伊達の靈山に籠城し、その後、帰京の途につくことになりました。

田舎の農夫に身をやつした親王は、馬ではなく歩いて進みました。安達郡菅ノ沢(杉沢)というところにさしかかると雨になったので、進む道の行方にも惑いながら休み休み進み、さらに歩みは遅くなっていました。こうした親王らの難渋する姿を菅ノ沢の住人三瓶美濃が見ていました。美濃は、涙を流して実沢までの道案内を申し出ました。しかし、移川にさしかかると、川は折からの雨で、増水し、そこにかかる橋を渡ることはすでに難しくなっていました。そこで、美濃は自ら親王を背負って川に入り、濁流の中を無事対岸へ渡したのでした。このとき、親王が「我渡る」とおっしゃったことからこの場所を「川渡」と呼ぶようになったといえます。

三瓶美濃は、八竜山までお供をしてきましたが、やっと親王がご休息することができたので、この地で別れました。そして、この八竜山に親王たちのお休み処として「御塔壇」「御聖壇」「御参議壇」と称する場所を設けたのが現人神社の始まりとされます。そして、文中年間に、親王の御尊影を奉るためにこの山に祠を建立し、ご尊像三体を造り、現人神社を勸請しました。

なお、明治維新後は、一言主命を主神としています。また、昭和の終わりに至っても杉沢村の三瓶家にては歳の初めにご幣束を納めているとのこと。

(「現人神社覚書」「おらが里のざっと昔」／富田耕一氏談)

## 8 大日堂 ～ご来光奇譚～

樹齢700年といわれる古い桜の脇に大日堂があり、本尊大日如来像が安置されています。お堂ができた年代は不詳ですが、大日婆様と呼ばれた尼僧が、お堂に住んで守っていました。その尼僧は、人徳も高貴で仏をひたすら信奉する人物であり、お堂や井戸は、尼僧が神経の病などへのお祓い・祈祷をした料足と信者の寄付によって建てられたのだと氏子には伝わっています。

この大日如来のお祭りが行われたある年の8月8日の前夜、念仏講の読経が信者氏子により行われて、盆踊りも深夜まで続けられていましたが、その最中に、大日如来より突然光明が発せられ、周りが真昼のような明るさになりました。一同は大いに驚き、このご来光を大日如来の不思議として語り継ぎました。このご来光を浴びた人は、病氣も治ってみんな長生きになったといい、以来、諸願成就の如来様として尊崇されました。

(「おらが里のざっと昔」／富田耕一氏談)

## 9 高木神社 (旧豊前寺) 一1 ～坂上田村麻呂・徳一大師伝説～

延暦年間に坂上田村麻呂が桓武天皇より征夷大將軍に任ぜられ、刀を授かって東夷の征伐に赴きました。しかし、敵が、幻術を持って霧を降らしたため、容易に討伐を図ることができませんでした。そこで、田村麻呂は、高野ヶ丘に陣を敷いて、天神地祇に祈誓しました。するとたちまち白い羽の神鳥が空中を照らして飛来し、鳴き声である方向を指し示して去って行きました。部下を率いてその方角に進むと、大神の神通力によって雲霧はたちまちに晴れたので、田村麻呂は、蝦夷の巢窟をさんざんに打ち破り、ついには、東夷をすべて平定しました。

田村麻呂は、東夷の地を鎮護できたことは、まさに神の力によるものであると祈願成就の御礼にこの山に詣で、大同2年(807)11月15日に高野ヶ丘に小祠を建てるとともに、徳一大師を開山として高木神、勝軍地蔵の二社を勧請して寺を建てて、これを豊前寺と称し、社僧を置いて高野郷の鎮守として崇めました。

これが今の高木神社の始まりです。

(「おらが里のざっと昔」「各寺社御由緒調査」)

## 9 高木神社 (旧帝釈天) 一2 ～南朝の皇子義良親王伝説～

坂上田村麻呂の子孫で、高野郡の領主田村頭谷公が郡内に四十八箇の城を置き、郡を治めていたときに実沢館主山城守が祖先の志を継承し、先頭に立ちこの社の信仰を守っていました。

後醍醐天皇が鎌倉幕府を倒し、建武の新政が行われると、北畠頭家が陸奥守となり、義良親王を奉じて奥州鎮守府多賀に下向してきました。しかし、足利尊氏が反旗を翻して南北朝時代になると、南朝方は戦いに利なく、義良親王らは伊達の靈山に籠り、その後、田舎の農夫のごとく身をやつして、難渋しながら間道を通って帰京の途につきましたが、ついにこの実沢村で行き暮れてしまいました。この有様を知ったこの地の村長(むらおさ)佐久間右京大夫は、村人を呼び集めて親王たちのためにこの高野ヶ丘に御小屋を作り、この地の食を奉りました。

親王が小屋から山の方を見ると、右には桜、左には桂、さらには翁銀杏、姥杉、櫻、桧などが高く生い茂って雲にそびえています。また、山の形はあたかも鳥足のようで、一つ頂から山脈は四つの稜線に分岐しています。そこで皇子はこの山を鶏足山と名付けました。

村人達は親王のお座りになるところが不浄であるのは恐れ多いことだと思い、新しく七府の薦(こも)を編み、この上に親王らを案内しました。そのときに、親王が座って詠んだ歌が次の二首。

さして往く伊達の靈山を出でしより天が下には隠れ家もなし

乱れ世の隠れかくれし御在所籬の民らの厚き心は

そして、この真筆を置いて別れを告げました。その後、しばらくして親王は、後村上天皇になりましたが、足利氏に存念を残し世を去りました。右京大夫は、村民を集めて親王を偲び、御真毛の字を天王(天皇)としてお宮の中に納め合祀しました。しかし、ただの天王というのも恐れ多いことだとして、文中元年(1372)9月19日に、別当諦濡が帝釈天と改めたということです。

(この時、豊前寺の勝軍地蔵は、瑞雲禅師の開基である金剛山瑞禅寺に下されたと伝わります)

(「おらが里のざっと昔」「各寺社御由緒調査」)

## 9 高木神社 (旧帝釈天) — 3 ～戦国大名田村氏の戦勝祈願～

戦国時代も末期、田村清頭が塩松城主と争いとなり、新殿の千石畑で一戦を交えたところ、田村勢が敗北して、一旦塩松郷の青石に兵を引きました。このときに田村清頭は帝釈天への戦勝祈願をすべく、家臣の吉田氏を名代として当社に遣わしました(田村清頭自身が参拝した、または橋本刑部を遣わしたとの説あり)。そして、再度青石村で開戦したところ、(天正13年6月18日己の刻より申の刻まで)田村勢が勝利を得て、ついに塩松領である青石を占領し、以来青石は田村郡に属することとなりました。

以来、帝釈天はこの戦勝の日を祭日としました。また、田村隠岐守の寄付を受け鳥居を建立、下馬札も建設された帝釈天は、敷地広大な官社となったということです。田村氏以降の領主からも、代々北方守護神として尊崇を受けたと伝わります。

(「おらが里のざっと昔」「各寺社御由緒調査」富田耕一氏談)

### <要田地区>

## 10 古殿観音堂 ～熊耳の大井戸と十一面観音さま～

要田の熊耳地区古殿には大井戸と呼ばれている井戸があり、古くから雄井戸と呼ばれています。日照りで水不足のときでも、枯れることなく水が湧いて、飢饉から村を守ったといわれています。

あるとき、この地方で飢饉がおこり、疫病が流行って人がたくさん死んだときに、ある娘が疫病にかかりましたが、この井戸の水で薬をわかして飲んでみたところ命が助かりました。娘がそのお礼に井戸の傍らの水神に参るとその夜の夢に神があらわれて、その化身である十一面観音を祀ってくれるようお告げがありました。

それを聞いた人々が、喜捨を募って雄井戸の近くに十一面観音様を祀ると清水からは、さらにこんこんと清水が湧き、日照りで付近の村々が困っているときでも、田んぼを潤したので、困ることはなく、飢饉を免れたということです。もちろん、病には薬はこの水でわかすとよいとされました。

井戸(池)の奥には二本の大杉があり、その間にケヤキの大木があったのですが、傾いて危なくなったので、近年切ってしまったために、今は半分ぐらいの水量になってしまったとのこと。

雄井戸に対して雌井戸と呼ばれる清水も雄井戸の裏山の陰に残りますが、今は、ほとんど水は涸れてしまっています。(往時は、やはりこんこんと水が湧き出る名水であったそうで、雄井戸とつながっているという伝承も残ります。)

また、熊耳の十一面観音は、何でも願いを叶えてくれる観音様ということで、馬の安産・良馬の生育を祈る信仰も盛んでした。この御堂には、勢至菩薩とされる尊像もありますが、これは、午(うま)年生まれの子の守護仏であることから、馬産への厚い信仰と習合されたものと思われます。

他にも、子育て地蔵(子安地蔵)尊も安置されて信仰を集めました。

(「三春町史」／富田耕一氏談)

## 11 春日神社 ～学僧屋敷の話～

昔、お城山に舞鶴城があり、秋田公という殿様がいたころのことです。南成田と北成田の鎮守春日神社は、お城の鬼門に当たるので、殿様の祈願所としていたそうで、殿様が祈願に来られたときの休憩所として、神社の下に成伝寺というお寺を建て、神社の別当として法印を住まわせていました。その法印は、殿様の将棋や碁の相手をしていましたが、学僧と呼ばれるほどの切れ者でしたので、殿様を度々負かしてしまいました。あまりに強いので殿様の機嫌を損ねてしまい、別当の地位を追われてしまったそうです。そこで法印はやむを得ず丸塚の山に小さな庵を建てて移り住みましたので、ここを学僧屋敷と呼ぶようになりました。学僧屋敷の法印は村人たちに大変慕われていましたが、殿様の弾圧が厳しくなり、ついにはそこにもいづらくなり、安達太良山へ飛んで逃れたといわれます。あるとき、法印を慕う村人が安達太良山に見舞いに行くと、お礼として法印は素麺をたくさん

作って振る舞ってくれたといひます。しかし、あまりにたくさん作りすぎてしまい、それを捨てたのが岩となり、素麺岩といわれようになったといひれます。今でも岳温泉へゆく途中で眺めることができます。 (「おらが里のざっと昔」)

## ＜御木沢地区＞

### 1 2 鹿島神社 ～鹿島さまの靈験と宮信田の由来～

昔々、今から 450 年ほど前、米が少しもとれない不作の年が続いて、ついに種籾や神様に供える米さえとれない年がありました。しかし、鹿島神社の陰の山に挟まれた細長く西下がりになっている田だけは、どんな不作の年でも米が実って、この年もこの地区の人々はここの米を食べて、飢えをしのぎました。これは、鹿島さまのおかげであるということで、それからは、神様に供えたり、種籾を取る米には、汚い肥料を掛けないで作るようになりました。そして、それを伝え聞いて、信仰する人もたくさんお参りに来るようになり、大変賑わったということです。宮信田の地名は、鹿島神社のお宮の宮、信仰の信、米を作った田の田をとってその地名になったといひれています。

なお、丹伊田の鹿島神社と松沢の鹿島神社は、宮信田の鹿島神社の御分霊であるということです。

(「おらが里のざっと昔」／橋本吉雄氏談)

### 1 3 篠ノ内地蔵 ～義民(善吏菩薩)伝説～

今から 500 年近く前、飢饉が続き餓死する者が多くあったため、七草木村の庄屋(武像氏)は、村民のために米倉の開放と年貢軽減を代官に訴えましたが、代官は聞き入れてくれませんでした。そこで庄屋は、穀倉を開けて米を百姓に与えました。しかし、自分の命令に背いたとして代官は怒り、庄屋を捕らえ築館山で磔にしてみました。これを悲しんだ村人は、篠ノ内地内に地藏菩薩を祀り、命をかけて自分たちを救ってくれた庄屋を「善吏菩薩」として供養しました。近郷近在からの参詣者が絶えず、露店までが出たので、この地を町畑または町田と呼ぶようになったそうです。

(「おらが里のざっと昔」／「三春町史」／橋本吉雄氏談)

### 1 4 阿弥陀院尊陽寺 ～絵解きに人々が集ったお寺～

中世のいつのころか、「越中守」と呼ばれる領主がおり、尊陽寺は、その人物の持ち寺で安達松沢村との境にあったと伝わります。その後、二度の火災・天災で現在地に移りました。

江戸時代中頃、七草木村の庄屋を務めた武像家に平沢村の平沢家庄屋の家から娘婿に入った半次右衛門は、子どもの頃から平沢村の満願虚空蔵を尊崇するとともに信仰の厚い人物でした。半次右衛門は養子先の七草木村の人々の心の平安を強く願いましたので、損傷の激しい阿弥陀院尊陽寺の再建を果たし、21 才という若さで亡くなった愛妻を偲び、戒名「紅顔玉照大姉」を住職の実範和尚からいただくと、その供養のために阿弥陀院に不動明王像と脇侍を寄進しました。

その後、阿弥陀来迎図などを次々に寄進して、半次右衛門の厚い信仰に支えられた尊陽寺には、様々な仏画が整えられ、盂蘭盆、彼岸、涅槃会や念仏請などの時に、「絵解き」が催され、近郷近在の人々が集い仏の教えを聞いたそうです。尊陽寺は、中世から近世まで、年中行事や教育、医療、福祉など地域の人々の心身の生活に大きな影響を与え続けた寺院でした。

(「七草木阿弥陀院造営記」／橋本吉雄氏談)

## 15 若草木神社 ～殿様の参拝～

七草木村の鎮守若草木神社は、江戸時代までは「王子大権現」と呼ばれ、神社ではなく、神仏習合の社で、かなり古い歴史を持つと伝わります。「ゲンバシタ」と呼ばれる場所がありますが、（これは「ゲバシタ」が正しく、「下馬下」と漢字は充てます。）ここが若草木神社の参道の始まりで、三春の殿様が、小浜に向かう途中、道中の守護を願い、この神社にわざわざ立ち寄って祈願したという伝えがありますが、そのときに、ここで馬を下りてそこからは歩いて参拝したということです。「下馬下」から若草木神社まではずっと杉並木が続いていたということで、今も切り株が残っているそうです。なお、社殿の龍の彫刻は、沢石の名工がつくった傑作、また、のぼり幡は、三春が生んだ自由民権運動のリーダー河野広中の筆によるもので、石柱の文字は明治から大正時代に活躍した漢学者で二松学舎大学学長を務めた児島献吉郎によるものです。

（橋本吉雄氏談／橋本孝弘氏談）

## 16 満願虚空蔵堂 ～新羅三郎義光伝説～

みちのくの平沢村に鎮座する満願虚空蔵菩薩は、奈良時代末に比叡山延暦寺を開かれた伝教大師最澄の彫ったものと伝わります。

平安時代、源義家が奥州に起こった大乱（前九年の役・後三年の役）を収めるために、朝廷の命を受けて出兵しましたが、なかなか思うに任せず、苦戦を強いられついには病にもかかってしまいました。義家の弟で笛や笙の名手であった新羅三郎義光は、慕う兄が苦境にいることを知り、何とかこれを助けようと急いで奥州に赴きません。しかし、三陽（三春）を通過しようと宇久地の館で休んでいるときに、途中の無理がたたって病にかかり、かねてから信仰していた虚空蔵菩薩に兄が無事大乱を収められるようにと祈りながら、無念の中でこの地で亡くなってしまいました。人々は、これを哀れんで三郎が守護仏として持ってきていた虚空蔵菩薩像をこの地に安置して供養しましたが、三郎の思いがとどいたのか、義家の病は回復し、その後まもなく義家は乱を治めることができました。

その後、この虚空蔵様は、必ず願いをかなえてくれるという話が広まり、参拝者は絶えず、満願虚空蔵と呼ばれるようになりました。

その縁日には、あまりに大勢がお参りしたため、八島川に架かる橋が、その重みで落ちてしまい、地元の人々が橋を担いで参拝客を渡したので、この橋を「担橋（かつぎばし）」と呼ぶようになったという言い伝えも残ります。

また、参拝の人々の喜捨により、虚空蔵堂はお寺として整備され、仁王門や参拝者が泊るための宿坊もでき、茶店がたつて門前は大変賑わいましたが、おかげで、付近の苗代も参拝者に荒らされてしまうので、縁日の日も変えた話も残ります。しかし、残念ながら虚空蔵堂は火災に遭い、今は、仮堂の中に焼かれた虚空蔵菩薩像が遺されるのみとなっています。

なお、満願虚空蔵堂には、坂上田村麻呂の妹の悲劇を題材とした別伝があります。

（「おらが里のざっと昔」／「三春町史」／江幡仲衛氏手記）

## 17 物外地蔵堂 ～高僧誕生伝説～

戦国時代から江戸時代の初期に活躍した臨済宗妙心寺派の名僧に物外紹播という人物がいます、福聚寺で得度し、全国に修行の行脚に出かけ、武田信玄の師であり、「心頭滅却すれば、火もまた涼し」の名言を残した快川和尚など名だたる師家から認められ、大名諸侯の帰依を受けた禅僧です。徳川秀忠の招きを断り、宇都宮興禅寺に入り示寂しました。

この和尚様の母親は、平沢村出身で、大変賢い女性でした。身ごもって以来、無事の出産・成育を願って毎日実家の近くのお地藏様に一日も欠かさずお参りし、無事物外さまを出産されました。その後、のち我が子が福聚寺で得度するまでお参りを続け、立派に育てられました。この地藏様に拜んで、賢い物外様が生まれたということで、学問成就のほか安産、良縁、そして所願成就の地藏様として人々の信仰を集めてきました。

明治時代に東大の医学部を首席で卒業し、東大医学部に病理学教室を開いた平沢出身の三浦守治（旧姓村田）も繁くお参りをしていたと伝わります。知る人ぞ知る名利です。

（伴野恒氏談／渡邊俊三氏談）

## ＜中郷地区＞

### 18 大石稲荷神社 ～弘法大師伝説～

昔、弘法大師が食事中にこぼした飯粒が石となり、成長して大石になったと伝わります。あるとき、道路工事の際にこの大石を移動することになりましたが、いざ移動というときに、晴れていた空が一転にわかにかき曇り、雷が鳴り、激しい雷雨になったとのこと。また、この大石には、藤が被さっており、稲荷の笠と呼ばれていますが、ある人がこの藤を切ったところ祟りとなり、その年は米が全くとれなかったと伝わります。

なお、昔は、三春の庚申坂の女郎さんがよくお参りに来ていたといひます。

（「中郷の民俗」／木目沢伝重郎氏談）

### 19 甚十郎紋十郎地蔵 ～義民伝説～

貝山に甚十郎・紋十郎地蔵と呼ばれる地蔵があります。

元禄年間、貝山村に甚十郎・紋十郎という二人の百姓がおりました。どちらも義に厚く智に富んだ若者でした。その年は、日照り続きで、ひどい水不足であったので、二人は何とかしたいと思い、井堀田から水を引くより方法がないとして庄屋に申し入れましたが、庄屋は水源が低いから駄目だと言って、受け入れてくれませんでした。何度願っても相手にしてくれず、百姓たちは見るに忍びないほど落胆しました。そこで、二人は水路を堀り始め、百姓たちも協力しましたので工事ははかどり、見事な堀が完成しました。水は滔々と流れてきて、田植えができ、百姓たちは大喜びでした。一方、庄屋の面目は丸つぶれとなり、二人を目の敵としました。

その年の年貢の上納のときには、五升の不足となりました。二人はおかしいと思いましたが弁納しました。次の年も五升の不足というので、今度は承知できず、二人は村中の田圃を庄屋に妨害されながらも再測量し、苦心の末、庄屋のごまかしであることを明らかにしました。二人は、憤懣やるかたなく領主への直訴に及びました。

喧嘩両成敗ということで、庄屋は役を解かれて転封の処分を受け、二人も国払いとなりました。厳重に禁じられていた直訴の処罰としては、寛大な処置でした。二人は領外におりましたが、何用があつてか白装束で領内に入り、木戸で捕縛され投獄されてしまいました。福聚寺の和尚が救出に駆けつけたましたが、すでに斬首刑の後で、二人の亡骸を引き取り、丁重に葬ったといひます。これが、甚十郎紋十郎地蔵のいわれです。

（「三春町史」／「中郷の民俗」）

### 20-1 巖島神社の蛇頭石 ～松井民次郎の大蛇退治伝説～

昔、蛇石村にもものすごい大蛇がいました。時々山を下りてきては田畑の農作物や人畜にも被害を及ぼし、村人は困り果てていました。大蛇は胴回りが三尺、長さが七十尺あって、山から山へと地につかず渡り歩くので村人たちは恐れおののいていました。その頃の三春藩の殿様は、秋田俊季公で、このことをお聞きになって、それは何とかしなければならぬと勇気のある侍を募って何度となく退治させようとしてきましたが、悉く失敗に終わっていました。藩の槍術指南役の松井民次郎がこれを知り、単身蛇沢を通って蛇のすみかへと向かいました。そのあたりは川と岩と山が入り組み、不思議に神秘的なところで、何か隠れていそうな、恐ろしいものがいそうな地形で、その山頂には蛇枕石があり、大蛇の根城だといわれていました。民次郎はそこで大蛇と出会いました。大蛇は鎌首をもたげものすごい形相で民次郎をにらみつけ、一呑みにしようとしてきました。民次郎はこれを恐れず、槍を構えて対峙しこれが半刻も続きました。大蛇はついに怒って、さらに一呑みにしようと襲いかかりました。民次郎は槍で戦いましたが、槍は大蛇に奪われ、やむなく剣で戦いました。激しい戦いの中で、その突き出した剣がついに大蛇の急所ののどに深く突き刺さると、真っ赤な血が滝のように噴きだし、さしもの大蛇も音を立てて倒れてしまいました。その辺りは血の河となったということです。このことをお聞きになった殿様は大変喜び、松井家に代々200石を与えました。それからは安心して村人たちは暮らしましたが、大蛇の祟りを恐れて、蛇神様とも弁天様ともいわれるお宮（現在の巖島神社）を建ててその霊を祀りました。境内には大蛇の頭だったといわれる大石がいまでも残っています。

なお、大蛇が枕にして寝ていたという蛇枕石の南側の樋渡川流域には蛇居る沢と呼ばれるところがあり、ここも大蛇の根城の一つであると伝えられています。また、根本の東光寺には、大蛇退治の際に殿様が祈願したと伝

わる観音様があります。

(「三春町史」／木目沢伝重郎氏談)

## 20-2 巖島神社の蛇頭石 ～松井民次郎大蛇退治別伝～

松井民次郎は、江戸時代後期出版の「松井民次郎英雄斬」「騎僊窟史」、明治中期出版の「松井報警記」「松井両雄美談」などの主人公として有名な伝説上の豪傑です。

三春の中郷地区に伝承する「蛇石伝説」では、三春藩槍術指南役として登場しますが、「松井報警記」「松井両雄美談」では、山形藩主松平下総守の重臣松平内蔵の次男に生まれ、十一歳にて異人に連れ去られて秘術を伝えられ、その後諸国をめぐり悪人、怪物退治で活躍、ついには非業の死を遂げた兄の仇討ちをする人物として描かれています。

三春へは、仇討ちの途中、伯父母である三春藩の家老秋田四郎兵衛夫妻のもとを訪れたことになっており、藩主秋田俊季が根本村に住む大蛇を退治に苦慮し、ついには自らが赴くのを聞き及び、隠れて同行。俊季が大蛇の眉間に鉄砲を打ち込んだにもかかわらず、大蛇は死なず、かえって俊季を追いかけ追い詰め、絶体絶命に陥ったところに現れます。そして、俊季を救い、手裏剣と怪力をもって大蛇を退治します。

松井民次郎の化け物退治の話は、浮世絵にもなっており、「木曾街道六十九次」(歌川国芳)の中の「山姥」が有名ですが、三春の大蛇退治も題材に選ばれています。

(「松井報警記」／「松井両雄美談」)

## 21 根本笠石八幡神社 ～八幡太郎義家伝説～

昔、八幡太郎義家が安倍一族討伐の折に、根本村に立ち寄りました。ちょうど麻疹(はしか)が大流行で、土地の人々は大変に困っていました。これを聞いた義家は、「それはかわいそうだ。その悪魔を征伐してやる。」と馬上から東の山に向けて、強弓に一矢をつがえて射放しました。麻疹の悪魔もその威勢に恐れて退散したのか、人々の重い麻疹も急によくなったということです。今も馬蹄のあとが、石についており、放たれた矢は、遠くの堀越村の井堀に落ち井戸になったと伝わります。後に村人達が、義家を偲んで祠を建てましたが、祠に至る前に二つに割れた石の胎内くぐりがあって、笠石とよばれる大石が乗っていたところから笠石八幡と呼ばれるようになりました。大石には、「はしかとて折ればかろし笠石の蹄の趾や八幡の家」と彫られていました。

古来、麻疹や疱瘡の予防や治癒に霊験があると伝わりますが、あるときに、近在の子どもが麻疹で死にそうになったときに、母親が百度を踏んでお参りしたところ治ったといい、それから近郷近在から子連れでお参りに来る人が絶えなかったと伝わります。

(「中郷の民俗」／木目沢伝重郎氏談)

## 22-1 狐田稻荷神社 ～狐が田植えをした話～

とつぷりと日が暮れた頃、灯りをともして館主の邸を訪れた一人の娘がおりました。娘が言うには「わたしは京の公家の娘ですが、道に迷ってしまいました。どうか一晩宿をお願いします。」とのこと。「宅には女はいないのだが、それでも良かったらどうぞお泊まり下さい。」館主は快くいいました。

娘は、一夜を過ごしましたが、出かけるふうも帰るふうもなく、幾日か過ぎました。邸の人たちも「あの娘は帰るふうもねえから、嫁に世話しべいでねえが。」「よがんべ。」などなど、寄るとさわるとその話で持ちきりになっていました。

これを誰かが仲に入って館主の耳に入れると、「おるならばよかろう。」という館主の返事です。娘も「おいてくれるなら。」ということで、めでたく縁談がまとまりました。娘はこの家の嫁様となったのでした。

何年か過ぎると、二人の男の子が生まれていました。兄は天童、弟は公子といいました。館主の家は幸福な日々を送っていました。

ある年の5月、田植えの節となりました。館主の家でも田植えの準備が進み、明日は田植えという日は、一日苗とりをしました。ところが、天童と公子の二人が発疹にかかってしまい、嫁様は寝ずに看病していましたが、これまでの疲れが出たのか、つい居眠りを始めてしまい、そのうち深眠りとなってしまいました。そして、狐の本性が現れて、尻尾が出てしまったのでした。これを見た子どもたちは、「おかあさんにはしつぽがあるの」とい

いました。尻尾を見られてはもういることはできません。

真夜中を過ぎた頃、館の者が小用に起きたところ、館主の田んぼが昼のように明るくなっています。「これは驚いた、ただごとではない。」と静かに人々を起こしました。遠見をすると、女が5～6人あげ手ぬぐいをして「天童・公子の父が田に、よかれ、あしかれ、よかるべし」と歌いながら田植えをしているのであります。やがて田植えが終わったかと思うと、親狐らしいものが泣きながら稲荷神社の石段を登っていきました。

夜が明けて田んぼに行ってみると、宵に取った苗は全部植えてあり、足りないところに松の小枝が差してありました。邸の人たちはこれは人間の仕業ではないからと、手を付けずにおいたところ、松の小枝もいつしか稲に変わり、秋には立派な穂が出たのでした。

それから、古く柏の郷と呼ばれていたこの地は狐田と呼ばれるようになったのです。(屋敷内に三白狐稲荷があり、秋には甘酒をあげてお参りしているとのこと。)

(「中郷の民俗」／「三春町史」)

## 2 2 - 2 狐田稲荷神社 ～狐田のお稲荷さまと守城稲荷さま～

宝暦9年(1759)に書かれた「松庭雑談」という記録に次のような話が載っています。

ある年の大晦日に、藩の重臣である秋田季賢という人物が、狐田のお稲荷さまに参拝するつもりでいましたが、藩のしごとが最後まで忙しくて行けなくなってしまいました。しかし、今年中になんとかお礼がしたいと思い、同じ稲荷である中森稲荷(現在の守城稲荷)に雉一羽と玉子を奉納しました。そして、元日の朝に再度お参りしてみると、奉納したものはすでに無くなっていました。これは、夜中に取っていったものでもあったのだろうと思って、2日早々には本願の狐田のお稲荷さまに参詣しました。すると、そこには、中森稲荷に献じたはずの雉一羽と玉子がおいてあったのでした。

この話が伝わると、両社ともに前にも増して人々の尊崇を集めました。

(「松庭雑談」)

### <中妻地区>

## 2 3 塩釜神社 ～水かけ祭りの始まり～

西方では、「水祝い」といって、元日に「水かけ祭り」を行います。明応年間のこと、田村義頭の家臣であった千葉紀伊守が、西方の鎮守として陸前塩釜神社の御分霊を勧請したとされます。ある日、近くの井戸から霧が立ち上り、神社の方へとなびくので、神下ろしをしたところ、「水祝いの行事を行うべし」との御託宣があり、「水かけ祭り」を行うようになったと伝わります。

また、別伝として次のような話も伝わります。

昔、この村に疫病が流行したときに、水場から霧が立ち上るとまもなく疫病が収まりました。一村全滅にも成りかねない伝染病が、霧のごとく消滅した喜びに村人達は、「これは鎮守の塩釜神霊の奇瑞に相違ない」とその加護に感じ、水を祝うために若連が正月に垢離を取り合いました。これが発展して「水かけ祭り」が毎年行われるようになったというものです。

(「三春町史」／「おらが里のざっと昔」)

## 2 4 西方乳付け観音堂 ～坂上田村麻呂伝説～

延暦のころ、征夷大將軍坂上田村麻呂が蝦夷征伐に来て、その手始めに大多鬼丸の出城国見山を東より攻めました。大いに苦戦したので、西の沼沢から攻めることにし、沼沢に大軍を休ませ、戦勝祈願を行いました。このときに人々や近郷の豪族や人々が総出で、傷病兵や軍馬の手当などを行い、西方村の人々も総出で手伝ったのですが、軍馬の多くが傷ついているのを見て驚きました。西方は、耕地が少ないので各家で何頭も馬を飼ってましたが、大多鬼丸の略奪から守るために奥地に放し飼いにしていました。村人たちは「この村では、献上する食べ物こそないけれども馬がいる。村中の馬を集めて献上しよう」と相談し、大声で放した馬を呼び集め、子馬を残して田村麻呂に贈りました。田村麻呂は「この贈り物は一生忘れんぞ。」と大いに喜びました。

その後、大同年間に蝦夷征伐を成功させた田村麻呂は、磐城地方を廻り、戦死した兵馬の供養を行いました。このときに、本陣にしていた東堂山に大伽藍の満福寺を建立し、馬頭観音を安置しようとして一番大きな檜で彫りましたが、できあがった仏像は伽藍に比べあまりに小さかったので、大きな観音に彫り直し安置したのです。このとき田村麻呂は、「国見山の出城を攻めて多くの軍馬をなくして沼沢という村落で休養したときに、名も知らぬ小さな集落の百姓たちが大声を上げ馬を追い集め、親馬を全部贈ってくれた。それで、大いに助かった。その沼沢の西方の村に、子馬が安産で生まれ、丈夫で良馬に成長するようにこの観音様を贈ろう。この観音様は、小さいが、大木の根元で作ってあるので満福寺の観音に対して姉観音であるぞ。大切にするように。そしてまたこの村を大声村という名にするように」といい、村に馬頭観音像を贈り、この村は、大声村になりました。(田村郡の東に大声(大越)村があったため、いつの頃か、西大声村と呼ばれるようになり、その後、西方村へと変わったそうです。)

この観音さまは、子馬が乳を飲めぬ時に祈願をすれば子馬は吸うようになり、親馬は吸わせるようになるといわれ、乳付け観音と呼ばれるようになりました。東堂山満福寺に参詣する人は、必ず、この観音様を拜んでから詣でたといわれ、数百枚の絵馬が奉納されるほど信仰を集めたそうです。

(「おらが里のざっと昔」)

## 25 齋藤 愛宕神社 ～子どもと遊ぶ愛宕さま～

大正15年(1926)11月28日、齋藤村は花火の不発弾から大火となり、松樹神社、安養寺を焼いた炎は、西風に乗って山頂にある愛宕神社に迫りました。夕方、神社の方に火の手が上がったので、村人が駆けつけたところ、周りの山はもちろん縁の下の木の葉まで燃えていたにもかかわらず、神社の萱屋根も板張りの壁も焦げた跡さえなく、以前の姿のままがそこにありました。人々は「あの強風で下から吹き上げた炎を真正面に受けても燃え残るとはなんと不思議なことだ。愛宕さまは、火伏せとやけどを治す神であるというが、その神威を目の当たりに見た。自然に頭が下がることだ」と驚き感じ入ったということです。

また、少し昔のことですが、子どもたちが、夏になると愛宕さまと呼ばれていた仏像を持ち出し、大滝根川の泳ぎ淵に行って、川に投げては、泳いで取りに行く遊びを繰り返していました。そのうち村人に見つかり、散々叱られましたので、子どもたちは、その後は愛宕さまを持ち出すのをやめました。

ところが、子どもを叱った村人は、得体の知れぬ病にかかってしまい、医者にかかっても治りません。そこで、法印さまに頼んでみたところ、愛宕さまが現れて「毎日子ども達と一緒に遊びにでていたのにおまえが咎めたので、遊ぶことができなくなってしまった」とのこと。法印様にお詫びをしてもらったところ、たちまちのうちに村人の病は全快したということです。しかし、次の年に愛宕様に行ってみたところ、すでに愛宕様はなくなってしまっていたということです。

(「おらが里のざっと昔」)

## 26 見渡神社 ～盗人の改心～

見渡神社は、旧齋藤村の総鎮守です。(別当の法印さまである)伊藤氏の遠祖が農の神として、宝亀元年(770)に天弁羅雲命を月見崎に勧請して松樹大明神と称したといわれています。治安元年(1021)ごろ、伊藤氏の霊夢に神が現れて「我は戸の内に行きたい」とお告げがあったので、村人たちと相談して、万寿元年(1024)天照大神、月夜見命を合祀し、三渡大明神として現在地に祀りました。

永暦元年(1160)頃、ご神体が社から盗まれそうになったことがありました。盗人は、村境まで逃げましたが、それよりは、足が地面にくっついて一歩も前に出ることも持ち上げることもできなくなり、おまけに腹も痛くなってそのまま座り込んでしまいました。盗人は「これは三渡大明神の罰があたったのだろう。ああ俺がわるかった。これからは盗人をやめて真人間になろう。」と心に誓いながら立ち上がってみると、あれほど痛かった腹の痛みが治り、地面にくっついて足も歩けるようになりました。喜んで社に戻ってご神体を納め直していたところを村人に見つけれ、捕まえてしまいましたが、盗人は、今までの出来事を村人達に全部話して「このおれも、ただ今より真人間になったのだから、なんとか助けてください。」と土下座して謝りました。村人達は、別当の法印さまと相談してこの盗人を罪には問わなかったということです。

(「おらが里のざっと昔」)

## 27 安養寺 ～良笈上人とねじれ観音～

旧中妻村の斎藤にある寺は、もとは安養庵と呼ばれ、寛永2年(1635)三春大町の浄土宗の寺院である紫雲寺の開山住職であった良笈上人善龍和尚の閑居寺として創建されたそうです。良笈上人は、とても徳が高いお坊様で、たくさんの人々から尊崇を受けましたので、その浄財により紫雲寺は経済的にも豊かなお寺になりました。ですから、そうしたお坊さまが斎藤に来たことを伝え聞いた村や近隣の人々は上人の法話を聞こうと集まり、説教の日や縁日には茶店も出るほど多くの人で賑わいました。

その後、浄財を集め、本尊如意輪観音像と三十三観音像を江戸から仏師を招いて作り、観音さまの縁日3月17日に開帳することに決めたのですが、開帳の日が近づいた頃、本山から、「(浄土宗)本尊は阿弥陀如来であるべきはずなのに、なぜ如意輪観音にしたのか、開帳の日を変えるべし。」とのお達しがありました。

檀家の人たちは困りましたが、徳の高い良笈上人は、檀家の人々を集めて「夢に如意輪観音様が現れて、17日のご開帳を19日に延ばしてほしいとおしゃっている、18日にと何度もお願いしたのだが・・・」と話しました。相談をして、やむなく19日に開帳、弘法大師の縁日の21日までの3日間お祭りを行うことにしました。すると、その困った様子を見ていた如意輪観音様が、「ねじっちゃ(ねじれた)と口を開いたことから、これがまた人々に伝わってたちまち有名になり、どんな無理難題からも救ってくれる「ねじれ観音」と呼ばれ信仰を集めることとなりました。

開帳の日は、出店も村境の町田の鼻取り地藏まで並び、朝から参拝者がたくさん集まり長蛇の列ができました。3日間でお賽銭が一文銭で何俵分も上がるほど賑わったということです。

その後も、安養寺は、如意輪観音の功德を求め、良笈上人の徳を慕う多くの人々の信仰を集めました。大正15年(1926)11月28日、斎藤で大火があり、安養寺も類焼し、本堂を含め多くの仏像・仏画類が焼失しました。本日展示の仏像・仏画は、その災禍を免れたものです。現在の本堂は、平成時代に再建されました。

(「おらが里のざっと昔」)

## 28 子安薬師堂 ～坂上田村麻呂・徳一大師伝説～

延暦のころ、征夷大將軍坂上田村麻呂が蝦夷征伐に来て、その手始めに大多鬼丸の出城国見山を東より攻めましたが大いに苦戦し、西の沼沢から攻めることにし、沼沢に大軍を休ませ、戦勝祈願を行いました。沼沢の人々や近郷の豪族や人々が総出で、傷病兵や軍馬の手当などを行い、この地方に伝わる薬湯の茶で接待したので、將軍をはじめとして軍勢の士気が大いに上がりました。その後、大同年間に蝦夷征伐を成功させた田村麻呂は、磐城地方を廻り、戦死した兵馬の供養を行いました。このときに、徳一大師が、関伽井嶽に広大な寺院を建立し、薬師如来を安置しようしましたが、田村麻呂が、彫り上がった仏像を見ると、寺院の大きさに比べあまりに小さく、等身大の薬師如来を安置することになりました。そこで、最初に作った薬師如来は、「我は京の都より来て手始めに国見山の出城を攻めて苦労したときに沼沢という小さな集落で休んで民に薬のお茶をご馳走になったが、それで非常に勇気が出たことを思い出した。小さな仏像ではあるが、こわさずにあの集落に送ろう。」ということで、沼沢村に贈られたのでした。これが沼沢の子安薬師様であります。(なお、この御堂も、このときに徳一大師が開いたという伝承が残されています。)

この仏様は木の根元に方で作り、関伽井嶽の薬師様は根元より上の方で作ったので、沼沢の薬師様を姉薬師、関伽井嶽の薬師様を妹薬師と呼びます。姉薬師様は、靈験あらたかで、腹や目の悪い信者は、それぞれ腹、目の字を108字書いて奉納してお願いすれば必ず良くなるといひます。また、良縁にも恵まれ、子どもが生まれ丈夫に成長するといひるので子安薬師という名がついたとされ、祭の前日の宵薬師には、花嫁たちが姑に連れられて参詣し祈願したそうです。江戸時代、子室に恵まれなかった岩瀬郡塩田村長者の塩田新兵衛がこの薬師様に参って子どもが生まれたことを喜び、美しい厨子を奉納しました。(この厨子は三春町指定文化財)

(「おらが里のざっと昔」)

## 29 薬師寺 ～いたずら好きのじいさま～

鷹巣の薬師寺の薬師如来さまは、靈験あらたかで、特に目の悪い人が信じれば、必ず良くなると言われて古来より信仰が厚い仏さまといわれています。隣村の目の悪い女がその話を聞いて、毎日朝早く時間を定めて参詣し

て祈りを捧げていましたが、お寺の隣にいたずら好きのじいさまが、その姉さまをたまげさせようと考えました。そこで、姉さまの来る時間より早く薬師堂の中に入って、戸を細めに開けて着物の裾を巻き上げて腹ばいになって待っていると、何も知らない姉さまは、いつも通り参拝に来て頭を下げて一心にお祈りを捧げました。しかし、堂内で腹ばいになっていたじいさまは、寒くて腹が張って我慢できなくなり、ついでっかい屁を「ブー」とやらかしたからたまりません。外で手を合わせていた姉さまは、腰が抜けるほどたまげました。その拍子に目を開くと、目の前には戸のすき間から大きな一つ目で、ぼうぼうひげを生やした長いベロをだらりと下げている姿が映りました。姉さまは、願いが成就して如来様のお姿が現れたのだと思い、土に座って、「ありがたや、ありがたや」と涙ながらに拝んで帰ったということです。それから姉さまの目は開いてみるみるうちに良くなりましたが、いたずらしたじいさまの家は身上を潰してしまったそうです。薬師様はお祭は4月8日に行われ、今でも厚く信仰されています。

(「おらが里のざっと昔」)

## ＜岩江地区＞

### 30-1 直毘神社 ～武渟川別命の東征～

時は第十代崇神天皇の御代、詔を下され、大彦命を北陸に、その御子武渟川別命を東海に、吉備津彦命を西道に、丹波道主命を丹波へと四道将軍に定め、各地域の平定を命じられました。武渟川別命（たけぬなかわわけのみこと）は、大和を出ると、伊勢、尾張、三河、遠江と進み、駿河の富士川の安倍峠を越えて甲斐の国に入り、武川に出て武蔵、相模、下総、常陸を経て、磐城に入りました。そこから岩代に出る道を選ばれた命のご一行は、夏井川の南西の山道から、陸奥の真冬を白雪深い田村郡の山奥進まれましたが、道がますます険しくなるばかりか、寒さはいよいよ激しく、そのうえ連日の吹雪で、南の国の兵士たちは凍傷と疲労に苦しみました。この上、阿武隈川を渡り、安積平野を横切り、氷雪の奥羽山脈を越えることは情においてのびなく、部下思いの命は、朝日が差し、夕日が直照る陽向きのよいところを選んで、兵を休めることとしました。これが今の直毘神社のあたりです。命は、ほどよい日向きの丘を選び、手頃の櫟の木を求めて、幣を結び、種々のお供えをして、伊邪那岐、伊邪那美、神直毘、大直毘の四柱の神様をお祀りし、凍傷や病気に悩む兵たちの平癒をご祈願されたのが今の直毘神社の始まりであります。そして、この地で安らかに冬を越すなかで、大和の国の笠縫村から来た兵たちが、自生する菅草を見つけ出し、菅笠の作り方を里人に教えたのが、岩江菅笠の始まりであるといわれています。

安らかに冬を越した兵たちは、早春、西野平（いまの正神平）に勢ぞろいして都のほうを拝した後、氣勢盛んに、阿武隈川を渡り、安積平野を横切り、石筵で雪解けを待って奥羽山脈を越え、北陸から東征した父大彦命とお会いになったのであります。そして出会った地が相津（会津）という名になったと伝わります。

(「古跡をたずねて」)

### 30-2 直毘神社 ～舞木の名の由来～

昔、直毘神社の境内に一本の大木が立っていました。その大木のでっぺんのあたりの木陰は、山田から鷹巣に行く道が桜川を渡るときに架けられた橋まで届きましたので、この橋を日陰橋と呼ぶようになりました。また、ある大風が吹いたときに、この大木が根こそぎ飛ばされ、空に舞い上がりました。そこで、この地は舞木というようになりました。そして、舞い飛んだ木の根っこが落ちたところは、根木屋と名付けられ、木が落ちたところは木村という名になったということです。(別伝もあります。)

(三春町史)

### 31 北山地蔵堂 ～子どもと遊ぶ地蔵さま～

今から数百年前のこと、下舞木の北山部落の鼻たれ小僧たち数十人が、どこからか持ち出した石のお地蔵様を道や苗代の上で転がしてみたり、投げ合ったりして泥だらけにして遊び興じていました。通りかかった隣部落の人がみつけて「これはどうしたのか。もったいなや、もったいなや。」と子供たちにお金を与えて、お地蔵様を取り返し、丁寧に洗い清めて本堂に安置して、「子供たちがしたことだから許してください」と両手を合わせ、非常に良いことをした気持ちで帰りました。ところが、良いことをしたはずの人は、まもなく高熱に倒れ、枕も上

がらぬ身となってしまいました。家人が付き添って懸命に介抱を務めたが、当人はわけのわからないうわごとを口走るばかりで、日に日にやせ衰えていきました。

ある日のこと、白衣姿のお公家様のように品の良い若い男が、この人の夢枕に立ちました。球を転がすような声でいうには「私はこの前のお地蔵のお使いである。地蔵様は、せっかく子どもと遊んでいられたのに、余計なことをして本堂に安置されたため、子どもたちは一人も遊びに来ない。一日も早く子どもたちが遊びに来るようにお前が計らえば、病気もたちどころに消えるだろう。」とのこと。言い終わるとかき消すように見えなくなりました。早速言いつけられた家人が北山部落に駆けつけて訳を話したので、子どもたちもまた喜んでお地蔵さまと遊ぶようになりました。すると大病もまもなくけろっと治ってしまいました。以降、今日まで、近郷近在の人々から子育地蔵尊として親しまれ、特に子持ちの婦人から安産の地蔵様として尊ばれています。初めの一体が今ではなん十体が増えて、妊婦のいる家庭では、これを借りて行って、子どもが安産で、丈夫に育つように毎日お祈りしているとのことです。

(「おらが里のざっと昔」)

## 3 2 寺山観音堂 ～ツブ奇譚（観音堂を守ったツブ）～

昔のこと、御霊験のあらたかな千手観音さま（都から伝来したと伝わる仏さま）を祀っているこの寺山観音堂の近くで火事があったところ、境内の池のツブ（たにし）がみんな観音堂の屋根に上がってきて、お堂を火事から守りました。だから、この池のツブは、とがっている方が焼けて、三角になったのだといわれています。それからお尻のとがっているツブを池に放しても、いつしか三角に形が変わり、観音さまのツブと称して誰も取らないのです。

また、境内には観音さまの化身で、目の神様としても霊験があらたかな不動さまがありますが、観音堂と不動さまを拝んでから境内の池につながる湧水の水をいただいて持ち帰り、家で目を洗うと眼病やはやり目にたいへんよく効くといわれお参りする人が絶えなかったとのことです。

(三春町史)

## 3 3 薬師堂の由来 ～萱ノ木薬師伝説～

今から約 250 年程前、三春町下舞木の南端の山々は草刈場として知られ、村の青年男女が、毎朝馬や車を引き、鼻歌を歌って草刈りに通っていました。ところが、ある年の秋、この静かな土地に不思議なことが起こりました。山の峰にある大萱の木を馬に乗って通ると、決まって馬が怒って騒ぎ出して人が振り落とされるとということが三・四度も続いたのです。そこで、村の人々が大萱の木を調べてみると、木の根元にある大きな洞（ほら）の中に立派な薬師如来の尊像がいらっしゃいました。みんな驚いて大騒ぎとなりましたが、ちょうどそのころ、安積郡の多田野村別所というところでは、お薬師さまの御尊体がなくなり大騒ぎをしている最中でした。下舞木で薬師如来の尊像が発見されたことを風の便りに聞いた多田野の人たちは、もしやなくなったお薬師さまではないかと思い、早速代表の者が、下舞木を訪ねたのでした。すると、まさしくなくなった尊像に間違いがないことがわかりました。

そこで、礼を尽くして尊像を返してもらい、箱に納めて担おうとしたところ、箱の底が抜けてしまいました。新しい箱に変えてみましたが、何度やっても底が抜けて担ぐことができません。多田野の人は「これはお薬師さまがこの舞木の地をお好みになり、遷座あそばしたいのであろう」と思いましたので、舞木の人々に「尊像にふさわしいところを選んでお祀りして下さい。」とよくよく頼んで帰ったのでした。

このことが、下舞木を始め近郷近在に大評判となったので、村人たちは、念仏講中を組織して、喜捨を求めて村々をまわり資金を作り、下舞木石花地区の南方にある高台に御堂を建てて薬師如来の尊像を祀りました。これが、別所山薬師堂です。

(「おらが里のざっと昔」)

## ＜三春城下＞

### 34 華正院馬頭観音堂 ～坂上田村麻呂伝説・三春駒伝説～

延暦17年(798年)創建と伝えられている華正院馬頭観音堂の成り立ちには、次のような坂上田村麻呂の伝説が伝わっています。

平安時代の初め、桓武天皇から征夷大將軍に任ぜられて、蝦夷征伐を命じられた坂上田村麻呂は、京の清水寺で戦勝祈願を行い、戦いに赴きました。しかし、蝦夷は強く、粘り強く抵抗したので、苦戦が続き、長い長い戦の旅を強いられることとなりました。そうした中で、これまで長年、ともに戦い続けた愛馬がついに死んでしまいます。失意にくれる田村麻呂でしたが、ある晩のこと、とても景色のよいところで楽しげに遊ぶ愛馬の姿が夢に現れ、懐かしみます。そして、ようやく蝦夷征伐に成功し、京の都へ戻る途中、この地に差し掛かると、目の前にはまさに夢に見た通りの風景が広がっていました。田村麻呂は、生死を共にした愛馬を供養するためにこの地に観音堂を立てたという話です。

この後、馬頭観音堂は、坂上田村麻呂の愛馬供養の御堂として尊崇され、江戸時代には三春駒の馬産隆盛、無事生育を願い、多くの人々の信仰を集めました。

(三春町史)

### 35 八雲神社 ～疫病封じの胡瓜天王～

荒町の八雲神社は胡瓜天王と呼ばれ、祭礼には胡瓜二本を献じ、一本をいただいできます。また、境内の笹の葉を受けて家に刺しておく、疫病除けになるといいます。

田村義顕公が、三春城主のときに、領内に疫病が流行し、医者に手を尽くさせましたが、一向に効果が上がりませんでしたので、治癒の方法を聞くために修験者を京都の祇園社に遣わしました。修験者は、祇園社に参籠し、21日間の祈禱を籠めたところ、靈験が現れ、「生水を飲まずに胡瓜を食して渴を癒やせ」とお告げがありました。その通りにしてみると疫病を追い払うことができ、領内安堵の思いをしたのでした。そこで富士山と呼ばれていた今の天王山に祠を建てて祇園社の分霊をお迎えしたのであります。

(三春町史)

### 36 守城稻荷神社 ～藩侯の命名～

藩主、藩民の心の支えとして永く三春の城下を守ってきた社です。

正保2年、秋田河内守俊季が常陸宍戸より三春に転封の際に「祈願成就の神」として靈験あらたかな祭神「宇迦ノ御魂ノ神」を重臣渡辺弥右衛門に命じて城内の中畑山(花畑山)に鎮座させたのが始まりで、後に中森の地に移されたと伝わります。古来より靈験あらたかで住民の信仰が厚く、農民は五穀豊穡を、商人は商売繁盛を、庶民は難除けや家内安全・福運招来を祈願してお参りしたので、藩侯は藩民が精魂込めて藩の盛運に寄与しようとする心がうれしいといたく感動し、「真に城を守る祭神なり」として、自ら「守城稻荷」と命名し、造営・寄進したといえます。

江戸時代にはこの守城稻荷を中として、「上ノ森稻荷」、「下ノ森稻荷」の3つの守城稻荷を置いたとも伝わります。もう一つの伝説については、22-2の項を御覧下さい。

(「守城稻荷神社由緒」・「守城稻荷神社かわら版」)

### 37 州伝寺 ～本尊丈六仏の由来～

丈六阿彌陀如来は、延暦14年(795)坂上田村麻呂東征追討の折、田村麻呂が帰依する清水寺の延鎮が戦勝を祈願して、自ら脇侍の將軍地藏と毘沙門天とともに彫ったもので、延暦20年(801)第二回の東征から帰洛の折に、守山に大元帥明王を勧請し、赤沼にこの阿彌陀如来像を安置したと伝わります。その後、舞鶴行者が来て三春に赤海山満徳寺を開いたときに、そこに丈六仏を移して本尊としてしました。その後、享保の初めに順国という道心者が来て、新しく丈六堂を造営して安置しましたが、明和9年(1772)の三春城下の火災にあい、仏像だ

けが焼け残りました。文政5年(1822)に住職となった保観尼は、何とか丈六堂の再建を志し勸進を繰り返しましたが、果たせず、明治21年(1888)の州伝寺の火災で本尊までが焼失すると、仮堂に安置されていた阿弥陀如来像は、州伝寺本尊として移されたのです。

八幡町にある丈六の字名の由来になった仏さまです。

(「丈六堂建立勸進文」・「三春町史」)

### 38 天沢寺地蔵堂～身代わり地蔵尊／「安寿と厨子王」伝説のもととなった話～

岩城の太守であった岩城政氏公は、黄金花咲く陸奥四郎の太守で、文武両道に秀でた武将でした。しかし、いかなる業果かわずかな過失が原因で、時の帝の喚起をこうむり、筑紫の羽形に流罪となってしまい、お別れの時に地蔵菩薩の尊像一軀と什宝の系図一卷を夫人に託されました。あとに残された母子3人は、その後長い年月苦難の道を歩むこととなりました。やがて、姉安寿が12歳、弟対王丸(厨子王)が9歳を迎えたころ、父政氏公への思慕の念やみがたく、父の流刑の地筑紫を訪ねて国を發ちます。道を西へとり、波風荒き越路の浦、直江津を過ぎるとき、一夜の宿もなく野宿をしようとしたところに、土地の悪者山岡権太というものに騙されて、母は佐渡へ、姉弟は丹後の国由良の湊の山庄大夫(山椒大夫)という人買いの手に売り渡されてしまいました。その後母御前は、佐渡で艱難の末両眼失明されてしまいます。

一方、山庄大夫に売られた姉弟は、幼き身に言語を絶する苦役を強いられました。あまりの責め苦に逃亡を企てた対王丸ですが、捕らえられ、万が一の探索の目印にと、山庄大夫がその額に焼き鏝を当てたところ、対王丸の額には何の損傷もなく、肌身につけていた守り仏の地蔵菩薩の御額に歴然と焼き跡が顕れました。

あまりの不可思議な靈験に山庄大夫一味、ただ茫然と立ち尽くす中を、姉の助けを得て、対王丸は、素早く抜け出て、丹後の国分寺に身を寄せ、住職は、対王丸の身の上に痛く同情し、寺にかくまいました。やがて、山庄大夫の追手に行方を探知され、寺内をくまなく探し回られましたが、住職のとっさの機転で、本堂わきのつづらの中に対王丸を隠し、その上の経文を重ね、あたかも経函のごとくつくろいました。しかし、ついに追手の目に留まり、つづらの函は開けられてしまいます。住職もはやこれまでかと観念し目を閉じた瞬間、ああ不思議なるかな、つづらの中から地蔵菩薩の尊像が現れ、しかも、その御額から光彩陸離れとして光明が輝き渡りました。さすがの極悪非道な追手たちもこの靈験に恐れをなして、たちどころに退散したのでした。

世の人々は、これを伝え聞いて、尊像の廣大無辺の大慈悲心によるものと、語り継ぎました。このことが後に京都のさる堂上の耳にも達し、対王丸を召し出して祖先の家名を再興させました。これこそは、まさに地蔵菩薩の感応に非ずして何でありましょうか。ちなみに政氏公の苗裔岩崎政秀は、当山創設の大檀那、大功德主でその子孫は今なお連綿と栄えています。

(「天沢寺縁起」)

なお、この身代わり地蔵尊には、別伝もあります。弟を助けた姉が責め殺されたり、復讐を遂げ、母と再会を遂げるくだりは、この縁起には記載がありませんが、「三春町史」または、地元の人々の言伝えには残ります。しかし、いずれも「安寿と厨子王伝説」ひいては森鴎外の小説「山椒大夫」の原型をなす物語といえましょう。

### 38 天沢寺 ～和尚が侍をかくまった話～

松下長綱公が城主であったときのこと、天沢寺は、城の表門の正面の会下谷にあり、壮麗な意匠が目立つお寺で、長綱は、これを分相応として嫌っており、さらに自分が手打ちにしようとしていた侍を天沢寺の和尚がかくまい、あくまで渡さなかったために、寺を焼き討ちにしてしまったという話が伝わります。和尚がこれを幕府に訴え、松下家は改易となったというのですが、史実では長綱の焼き討ちは確認できません。伝承では、会下谷にあった天沢寺は、これにより現在の清水の地に移ったとされています。焼き討ちの話には、また別伝があるのですが、天沢寺には、今も寺に逃れてきた人を匿うための隠し部屋といわれるところが残っています。

(渡邊俊三氏談)

### 39 八幡神社 ～八幡さまの靈験と石灯籠

旧江戸街道から入る雁木田の八幡神社の境内に一对の石灯籠があり、「寛文七年八月十五日 施主大久保清八下総国結城の住」の銘が刻まれています。

古くから三春は生糸が特産で、関東商人も買い付けに来ていました。寛文六年秋、結城の糸商人大久保清八は大金を懐中に三春に入ろうとしていましたが、秋の日は暮れるのが早く、鷹巣村を過ぎると辺りはすっかり暗くなってしまいました。ひと山越せば三春だと寂しい山道を急ぐ清八の前に突然大男が立ち塞がり、「金を出せ」と脅しました。清八が、持参金を全部投げ出して命ばかりはと手を合わせているところに、供二人を連れた乗馬の武士が通り合わせたので、大男は慌てて姿を消しました。事情を聞いた武士は、清八をいたわりながら同行し、並松坂のところで、武士は自分の屋敷を問われるままに教えて別れました。翌日、清八が御礼のために教えられた武士の屋敷を訪れると、屋敷はなく、六地藏と御堂があり、近くに八幡神社がありました。清八はこれは、八幡様のご加護であったと悟り、翌年、石灯籠を献上したのであります。

(三春町史)

### 40 (旧明王院) 薬師堂 ～弘法大師伝説～

昔、弘法大師が、この地を訪れたときのこと、この地方では、疫病がはやり、村人は大変苦しんでおりました。この様子を見た弘法大師は、この地にとどまり、清水のわくところで手を清め、一体の薬師如来をその側にお祀りしました。するとたちまち疫病はなくなりました。この大師を偲んで後に村人が、御堂を建てたのが、薬師堂の始まりであるとされます。このとき、弘法大師が、手を清めた所は、その後、井戸となりましたが、この水でわかした湯や甘茶を飲めば、病は癒えるといわれ、祭日には甘茶が振る舞われました。また、この水を汲んで目を洗うと眼病が治るとされ、訪れる人が絶えなかったということです。(別伝あり)

(江幡仲衛氏手記)

### 41 法蔵寺 ～甘酒地藏尊のいわれ～

昔のこと、町方にある信心深い女がいました。嫁いできて子ができましたが、乳が出なくて、困っていました。女は、このお地藏様に乳が出るようにと毎日欠かさずにお参りしていましたが、ある時に甘酒を炊いたのでお供えをしました。すると、次の日からは余るほど乳が出るようになったので、喜んだ女はお礼に甘酒を上げ、その後も甘酒を作ると地藏様にお供えに上がりました。子どもは無事、賢く丈夫に育ったそうです。その話が広まって、乳が出なくて困っている家では、このお地藏様に甘酒を備えると乳が出るようになるという参詣する人が増え、御利益が伝わりと益々お参りの人は絶えなくなりました。乳の出が良くなった人は、お礼も甘酒を上げるといい、今でも、安産・子育てのお地藏様として有名です。

(法蔵寺多田照雄住職談／渡邊俊三氏談)

また、法蔵寺には、「六道図」や「地獄極楽図」「阿弥陀三尊来迎図」などの仏画が多く残されており、盂蘭盆や地藏盆などには、それが、近代に至るまで堂内に掛けられ絵解きが行われていました。薄暗い日本堂の中で地獄の世界が語られるのは、大変恐ろしかったと伝わります。

### 42 紫雲寺 (はら切り梅・猫石) / 高乾院 (大乘妙経供養塔) / 真照寺 (和尚の袈裟)

#### ～三春化け猫騒動伝説～

三春の化け猫騒動の伝説は、地域により、または各家によりそれぞれ少し違った話として伝わっています。ここに紹介する物語は、三春大町と丈六の古老からの言い伝えと三春町史に所収された話をもとに作成しています。

三春藩の殿様は、江戸にいる期間が長く、世継ぎの一人息子はまだ子どもでした。そのころ、家老の荒木内匠の権勢は、並ぶものがなく、荒木は、若君を廃して自分の息子を藩主にしようと考え、悪だくみを実行しようとしていました。この時若君に仕えていた守役は滋野多兵衛という侍でした。多兵衛には妻や子がおらず、年老いた乳母と一匹の黒猫ともに暮らしていましたが、仲間とともに昼夜なく若君のために忠勤をはげんでいました。

荒木は、褒美をちらつかせて多兵衛を味方に引き込もうとしますが失敗、ついには自分に味方する者を使って若君の毒殺や暗殺を企てます。しかし、若君の下を離れぬ多兵衛に隙はなく、これもことごとく見抜かれ、阻止されてしまうのでした。荒木にとって、滋野はまさに憎き邪魔者でした。だから、まずは、滋野を何とか亡きものにしようと悪い企てを始めます。

あるときのこと、滋野のもとに、在の平沢に戻っていた滋野の乳母が病で危篤であるという便りが届きます。家族のいない滋野にとって、乳母はたった一人の家族と同じでしたので、これを一目見舞うために、若君のお守りを同じ志を持つ同輩に任せ、会いに出かけますが、途中もしやこれははかりごとかもしれないと思い直して引き返しました。急いで屋敷の庭から駆け込むと、同輩の士はなく、なんと荒木らが若君の前に坐っています。まさに、若君は出された汁椀を手に今しも飲まんとするばかりでした。滋野はとっさに履いていた草履を投げつけ、草履はあやまたず汁椀に命中、若君の命は救われました。\*

しかし、若君に草履を投げつけたということで荒木は滋野の「無礼討ち」を家臣に命じ、大勢の者たちが追いついてきたので、滋野は後に心を残しつつも窮地をのがれるために血路を開き、城外に逃れ出たのでした。その足で自宅長屋に駆け込むと愛猫を手に、乳母に別れを告げるため城下外平沢村に向かいました。乳母は滋野の命を惜しみ、泣いて逃げることを勧めますが、若君を思う滋野は乳母に愛猫を預け、単身また城下に戻り、密かに旧友を訪ねて、若君の無事を確かめますが、これを見咎められ斬り合ううちに、探索は城下隅々に及んでしまいます。滋野は窮地を切り抜けてやっとのことで紫雲寺にたどり着きました。そして、もはやこれまでと思い、紫雲寺本堂庭の梅の下で、無念の思いを抑え瞑目し、いざ切腹に及ぼうとしたところ、何か膝にすり寄る気配に目を開きます。すると、なんと乳母の下に置いてきたはずの黒猫が鳴いてすり寄ってきたのです。さては自分の最後を悟って追ってきたのかと滋野は愛猫をかい抱き、黒猫に「無念なり」と言い残した後に、見事十文字に切腹を果たしました。黒猫はこれを見届け、滋野の腹から出た内臓の血をぺろりとひとなめすると、いずくもなく去って行きました。(滋野が切腹した時に傍らにあった白梅は滋野の腹から湧き出た血を地中で吸い込み、翌年からは紅梅になったと伝わります。現在の梅の木は2代目とも3代目とも伝わります。)

それからです。若君暗殺の陰謀に加わり、滋野をおとしめた人々に災害や奇怪な出来事が起こったのは……。ある晩に荒木内匠が屋敷で朋友の大河原佐柄と将棋を指していたところ、いずれからともなく滋野の亡霊とその傍らに怪猫が現れました。大河原がそれでも勇躍して自慢の槍でこれを突くと、怪猫が火を噴いて暴れまわり、2人は驚き助けを求め、へたり込んでしまいました。その後も怪異の現象が続き、大風台風の晩には裏山が崩れ、家屋が倒壊して圧死したり、家人が狂死したりして、ついには召使も暇を取るものが続出する有様となってしまいました。そして、ある風の強い晩に火災が起こり、荒木屋敷を始め、城や御殿、城下のほとんどが焼き尽くされます。この時、怪猫が口から火を吐いて(滋野の亡霊の槍から火が放たれたという話もあり)、荒木屋敷の屋根に火をつけ、荒木に与した者たちの屋敷にも火を放ったといひます。御殿を焼かれた殿様は、祈願所の真照寺を目指し逃げますが、黒煙とともに追ってきた滋野の亡霊と怪猫に追いつかれそうになります。しかし、間一髪新町の門前曲がり門まで迎えに出た真照寺住職が殿様を法衣で殿様の体を覆い隠したため、亡霊と怪猫には殿様の姿が見えなくなり、殿様は九死に一生を得たといひます。殿様は無事に真照寺に着き、仮の御座所を設け、火災も真照寺門前で止まりました。

しかし、その後も怪異現象は収まらず、大火が打ち続き、滋野の八十八回忌の年になると殿様が原因不明の病に倒れ、これが滋野の祟りとされました。そのため、藩では、滋野家を再興したり、滋野の霊の鎮撫のために藩主菩提寺の高乾院に写経石を修めた大乘妙典石写供養塔を立てたり、鏡石霊神を奉祀したりして供養するのですが、その後、殿様は療養の甲斐なく他界。その12年後の百回忌にも、滋野の亡骸を葬り供養を欠かさなかった滋野家の出入りの町人万屋(三瓶家)に藩侯から様々な特権を与え褒賞したり、紫雲寺で常念仏を行ったり、主夜神を祀るなどの滋野の霊を鎮めるための供養を代々続けたのでした。

しかし、三春では猫の芝居をやると大火が起こると言い伝えられ、今に至っても猫の芝居はやってはいけないとされ、猫は大切にされています。

(化け猫外伝)：あるときのこと、またもや城下に怪猫がまた現れ、大火となりましたが、剣術・槍術で名高い藩士らがこぞってこれを追い詰めたところ、怪猫は滋野が眠る紫雲寺山上へ向かいました。その途中で待ち伏せた槍の名手が、ついに猫の横腹に槍をつけます。すると、猫はギャーとひと啼きしてたちまちのうちに火輪の石に変じました。これを猫石と云い紫雲寺右手山上墓地に残っています。

(「三春町史」／「三春猫騒動」／江幡仲衛氏手記／大町大越家の伝承／渡邊みち氏談より作成)

- \* 滋野の切腹の原因については、家老の荒木が盗賊九平太を使って幕府から拝領した三日月丸という宝刀を盗ませ、刀番であった滋野にその責任をなすりつけ閉門とした上で切腹させたという話などもあり多様です。
- \* 文中の黒文字の部分は、特に多様な伝承が残るところです。

\* 滋野の切腹について、明治の初めの頃に書かれたとされる「秋田家騒動伝記」を紹介しましょう。

秋田輝季の嫡男廣季は、父とともに参勤交代していた。廣季は、滋野多兵衛という草川氏の妾腹の子を新規に召し抱えた。多兵衛は妻子を持たず、会下谷にあった廣季の屋敷の長屋に住まい、昼夜なく廣季に忠勤した。しかし、家老の荒木高村は、廣季を廃して我子を藩主にしようと画策し、邪魔者である多兵衛に無実の罪を着せて切腹を申し付けた。正徳四年十二月四日、紫雲寺の前庭が多兵衛の切腹の場と定められたが、最後を迎えて、多兵衛は世話になった平沢村に住む乳母に別れを告げたいと検死役に願う。検死役の一人大綱源之丞は反対するが、平野友之進は覚悟を以ってこれを認め、多兵衛は、乳母にいとまを告げに赴く。寺に戻った多兵衛は、平野に礼を述べ、介錯人の武田文六に腹を十文字に切った後に介錯をしてほしいと頼む。武田はこれを了承するが、多兵衛が腹に短刀を突き立てると、即座に太刀を振り上げたため、多兵衛は血眼で睨めつけ、武田は振り下ろせず縮み上がったという。墓地のない多兵衛は、出入りの町人三瓶幸三郎の墓に埋葬される。

その後、多兵衛に情けをかけた平野家は子孫繁栄、反対の大綱は改易となり、滋野の睨みつけらえた武田も乱心の上で改易となってしまふ。

しかし、廣季は、一年後に江戸で亡くなる。毒殺との風説があり、廣季の二人の息子も不審な死を遂げていた。そこで五千石秋田淡路守に後継の相談をするも淡路守はかかわりを畏れ、これを固辞。そこで、分家秋田家にすでに養子に入っていた高村の子息据季侶が頼季と改名して藩主となる。これにより、藩主の実父である高村の勢威は高まり、上席の家老の秋田四郎兵衛は享保十三年に三春を立ち退いてしまふ。かかる中、明和九年に荒木家に入出入りする商人の家から出火、城も城下も焼ける大火事となったが、不思議なことに会下谷の多兵衛が住んでいた屋敷だけが焼け残ったので、これは滋野の怨念による火事だとうわさされる。

その後頼季から五代目の謚季は、老中にもなろうかと評判の人物だったが、三春城中の元日年賀の席で突如乱心し、病気になる。新たな屋敷にて看病するが、その効果なく他界、龍穩院に埋葬される。この時秋田家では、様々な祈祷を行うが治らず、滋野の怨念を疑い、滋野の供養を行うが、効果はなかった。そこで、伊勢の松田主馬と云う人物が城内花畑に「鏡石靈神」という神社を祀り、滋野の霊を弔った。また、紫雲寺には五人扶持を納め、念仏供養を行い、その後も一人半扶持を納め続け供養を続けた。さらに、川原石を数千枚集め、菩提寺の高乾院で数十人の僧によって法華経八巻を写させ、これを藩主墓所の一角に納め、そこに藩主の墓石のような大きな石碑を立てて供養した。さらに、滋野の仏具料として年に一分二朱を納めた。

廣季の娘は、改易を防ぐため、頼季に嫁ぐが、床入りは拒み、それから秋田家正室には子ができなかったという。

弘化か嘉永の頃には、日夜守靈神を祀った。陰では鏡石は滋野、日夜守は廣季だとささやかかれながら、明治維新までは祭祀が行われていた。